

誤解を生む主題なき日本的記述

横田 満男
(技術英語研究会 OB)

私はさる生産会社で、海外向け技術文書の英訳を欧米人との **technical meeting** の通訳に 15 年程携って来ましたが、この間に異文化間 **communication** 特有の問題と思われる様々な問題を目のあたりにしてきました。

その中で最も興味を引かれるのは、論述の際に日本側が主題に言及しないため欧米側に混乱や誤解を生じる、というケースです。(ここで主題とは、**paragraph** における **topic** です) そして、このことは、気をつけないとかなり高い確率で落ち込む、技術翻訳上の落とし穴でもあらうかと思われます。

そこで、ご参考までに、その実例をご披露し、問題の原因について私見を述べてみたいと思います。

ケース 1

これはアメリカのトレーラー用特殊ばねのメーカーが、日本のユーザーを訪問したときのことでした。ユーザーは個々の具体的な問題について質問を浴びせ、アメリカ側がこれに解答するという場面が続きました。質問内容は、例えば「貴社のばねの **air bag** は、何気圧まで持つか？」などと専らばね各部の性能に集中して際限なく続くのです。するとそのうちに、アメリカ側が不思議そうな表情を見せ始め、果ては”**What do they want to know?**”と私に聞くのです。しかも、その眼は、明らかに、そんなにこの製品の性能が信用できないのかね」と言っています。

何故こんなことになったのでしょうか

か？それは、日本側が回答を求めた個々の問題は、アメリカ側にとっては「本当に聞きたいこと」ではない、つまり **paragraph** の **topic** ではないからなのです。**Topic** に言及しないで、ばねの性能について根掘り葉掘り聞いてくる！アメリカ側にすれば戸惑うしかなく、終には、不信感を持つに至ったと言うわけです。

ではこの場合の **topic** とはなんでしょう？それはそういう個々の質問事項ではないのです。むしろ個々の質問事項が来る根源的な状況に対するこのばねの位置付けのようなもの、例えば、黙認されている過積載でのトレーラーの運行と言う現状に対してこのバネの性能に何処まで対応できるのか？というようなことなのです。

この **topic** に先ず言及しておいてから個々の性能の質問に入るのが、この場合の欧米の論述上の論理である、そうすれば無用の誤解を相手側に生じなかった筈です。(このことは、**meeting** 後アメリカ側と話して確認しました。)

ケース 2

これは、ある特殊な材料でバネを製造する設備を西欧のあるメーカーから導入するときのことでした。材料に含浸させるガラス繊維を、二つの機械間で移動させることについてメーカー側に照会する質問状のある 1 項の和文についての質問です。その 1 項とは「ガラス繊維が **Roving Stand** から含浸機に運ばれる場合に、「1 階から 2 階へ、

また2階から1階へと極端なレベル差があってもよいか（約5cm）」と言うものです。

質問は、この項の記述でも topic が示されていないということです。なるほど質問は具体的に細かく表現してあります。しかし、そこに topic はありません。そのため、読み手を混乱させる上、質問が個別的であるため、網羅的な解答が得られないまじさがあります。topic に言及すればそういう問題は生じない筈です

ではこの質問文の topic とは何でしょうか？それは「ガラス繊維の遠距離垂直移動の可否」ということです。つまり（今までは水平に移動していた）ガラス繊維を、設備のレイアウトの都合で遠距離間を垂直に移動しても問題ないか？ということが本当に聞きたいこと」なのです。

この topic を正面に据えてから、次の前述の個別的な質問を発して初めて、読み手を納得させ網羅的な回答が引き出せるのです。

これら二つのケースに代表される問題の生じる原因がいろいろあるかと思えます。

日本語の論述法が演繹法なのに、欧米のそれが帰納法であるため（下村耕平氏／土居康郎氏の工業英語1985年12月号の「和英翻訳腕だめし」での解説）でもありましょう。あるいは、無限界→天→宇宙→地球という聖書の空間理念を発想のより所とする欧米人が、物語り展開でマクロからミクロへと break down するのに、日本人は身近な事柄を起点として、ミクロ→マクロと発想展開する（鹿嶋春平氏「聖書の論理が世界を動かす」ということも言えましょう。

しかし、私などには、基本的に、欧米人の発想傾向に「本質的」「普遍的」

「原理・原則的」などの形容詞が伴うのに対して、日本人のそれには「現象的」「個別的」などの形容詞がついてまわるように思えるのです。こういう拭いきれない心の動きの差のようなものが、前述の問題の発生につながるのではないのでしょうか？

2月に、IQ がとてつもなく高い米国の日系三世の少年が来日したとき、東大生と一緒に数学の問題に取り組むというテレビ番組がありました。そのとき彼は解答を出しただけでなく、設問法に問題があることまで指摘していました。一方東大生は、当然のことですが、解答を解いただけです。

彼は、ごく自然に、この設問の仕方が設問法の原則に照らして妥当かどうかを先ず考え、しかる後に解答作業に入ったのでしょうか。

与えられた課題を解くことがすべてであった東大生と、設問法の可否にまで目を向けたアメリカの少年、この鮮やかな対比の中に、私は前述の心の動きの差の一例を見たような気がするのです。